

神に称賛される私たちの生き方

注ぎの供え物 ～キリストの心と同じ心～

ペリピ 2:17～30

■ 神の御心を成し遂げるための「知恵」＝「祈り」

世の中では賢いことや立派な人のことを「知恵のある人」と言いますが、聖書で語られている「知恵」は、私達が世の中で聞いている知恵とは違います。そもそも、私達は聖書で語られている知恵をもっていません。それは、聖書が語る知恵は、自分の願いを果たすために用いるものではないからです。ヨハネの福音書に姦淫の女が捕えられ、石を投げられる箇所があります。パリサイ人たちは、それまでは見て見ぬふりをしていた姦淫の女を、ここぞとばかりにイエス様のもとに連れて行き、イエス様を罪に陥れようとしていました。しかし、イエス様は彼らの心に気づき、知恵によってこのように言われます。『あなたがたのうちで罪のない者が、最初に彼女に石を投げなさい。』（ヨハネ 8:7）

この一言でパリサイ人たちの心は変えられました。誰も自分には罪がないと言えなかったのです。そして、石打ちで殺されかけていた女性の人生も変えられたのです。この時、イエス様が求めたのは、自分を守るための知恵ではなく、彼女を守るため（救うため）の知恵でした。神の御心を成し遂げるために知恵で乗り越えた人がイエス様です。イエス様に会った私達は、孤独を感じ、同じ行動を繰り返すことをやめなければいけません。私達が神の御心を成し遂げようとするときに、私達の人生に奇跡が起こります。それは、そのときに私の方法ではなく、神様の方法が与えられるからです。知恵を求めていきましょう。祈りは、解決するには一番遠い方法に感じるかもしれませんが、しかし、祈りは「知恵」です。一番早い解決方法です。神様がその出来事をおして何をしようとしているのか、神様の御心は何かを、私達は祈りによって知ることができます。

■ 自分の目線

目から入ってくる情報は、私達の人生に大きな影響を与えます。問題が起こったとき、何かを指摘されたときに感じる心の葛藤は目から入ってきた情報によって引き起こされます。例えば、あなたの目の前で嫌いな人がよいことを言っているとしたとき、目は相手を見ているので、いろんな情報が入ってきて、相手が言っていることがいくらよいことであっても、その真意を受け取ることが出来なくなってしまうかもしれません。聞き方を変えてしまうほどに、見ることは私達に大きな影響を与えています。ですから、私達が何を見るか、その目線が大切です。自分の目線で物事を見るなら、神様が私達の人生に与えてくださる良いものを受け取れず損をしています。しかし、神様から「知恵」を受け、神様の計画を知ったとき、目の前で起こることに不安はなくなり、損することはありません。

■ 注ぎの備え物

『たとい私が、あなたがたの信仰の供え物と礼拝とともに、注ぎの供え物となっても、私は喜びます。あなたがたすべてとともに喜びます。』（ペリピ 2:17）この手紙の著書であるパウロは、自分の思いを果たすためにたくさん損をした人でした。自分の思いからキリストを信じる人々を迫害し、神様を裏切っていました。その過去の重荷を背負っていた彼は、もう自分の思いで人生を失うことが嫌だったのです。彼はこの手紙を書きながら、牢獄のなかで賛美をしていました。賛美の歌詞は私達が問題のなかにいるときには到底言えないような言葉です。パウロは喜ばないときに喜ぶために賛美をしていました。それは、神様の知恵によって問題を乗り越えたときに、神様の栄光があらわされることを知っていたからです。『神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私達は知っています。』（ローマ 8:28）彼は、今まで自分が背負ってきた重荷、自分が失敗したことも益となることを知っていました。だからこそ、自分のために生きることをやめ、注ぎの供え物となっても私は喜ぶと決断することができたのです。

■ 神様の目線

ダビデ像を彫ったミケランジェロは、岩を見たときに「この岩のなかに天使が捕らえられている。この天使を解放させるために私は最善を尽くしたい」と言ったそうです。神様の目線はこのようなので、自分を埋めて、自分を失くして岩のようになってしまった私達を、神様は解放させたいと思っています。それは、私達がダイヤモンドの原石であることを神様が知っているからです。しかし私達は、それはただの岩だと決めつけて、自分の人生を台無しにしているのです。神様の計画を壊すのは誰でしょうか？ 悪魔でしょうか？ 相手でしょうか？ 神様の計画を壊すのは自分（私）です。目線がずれてしまうからです。『あなたがたも同じように喜んでください。私といっしょに喜んでください。』（ペリピ 2:18）神様のされることはいつも、私達が喜ぶためにあります。そして、

その喜びは自分だけではなく、相手と一緒に喜ぶということです。ローマ書に『喜ぶ者といっしょに喜び、泣く者といっしょに泣きなさい。』（12:15）とあるように、私達は人と共感できなければ、神様と共感することもできません。神様の奇跡は喜ぶ者とともになされていくからです。

■ キリストの心と同じ心に

『テモテのように私と同じ心になって、真実にあなたがたのことを心配している者は、ほかにだれもいないからです。』（ペリピ 2:20）

ギリシャ人の父とユダヤ人の母から生まれた混血の子でもでした。ユダヤ人として認められない痛みのなかにあったテモテは、パウロの気持ちがよくわかりました。テモテもパウロも神様を愛していました。そして、その神様が相手を愛していることがわかったので、同じ心になれたのです。『だれもみな自分自身のことを求めるだけで、キリスト・イエスのことを求めてはいません。』（ペリピ 2:21）私達が自分のことを見るだけで、神様の思いに目を向けなければ次の道に進むことはできません。問題に目を向けて悲しんでいるだけでは、乗り越えることはできません。姦淫の女の現場で、もしイエス様が自分のことを思っていたら、二人とも石打ちで殺されていたかもしれません。しかし、イエス様は神様のことを思いました。そして、みんなが変えられる奇跡が起こったのです。

■ 訓練のときに与えられる助け手と小さな大丈夫

『しかし、テモテのりっぱな働きぶりは、あなたがたの知っているところです。子が父に仕えるようにして、彼は私といっしょに福音に奉仕して来ました。』（ペリピ 2:22）

ここで出てくる「働きぶり」とは、「練られた品性」という意味です。訓練のなかで品性が練られつつ、私達は奉仕をしていくのです。奉仕とは人生そのものであり、「生きる」ことです。その働きぶりは“子が父に仕えるようにして”とあります。原語には「仕える」という言葉はありませんが、ここは子が父を愛する自然な姿が品性によって与えられることで、神様との関係が親子の関係のようになるということです。本当に愛し合っている親子は厳しいことを言われても関係が壊れません。なぜなら、自分は愛されていることがわかっているからです。だからこそ訓練があります。あなたがたが厳しい訓練にあるなら、喜んでください。神様が造る土台は大きいのです。訓練の度に土台が大きくなり、強固になります。大きくなるチャンスなのです。だからこそ、乗り越えるまで諦めないで下さい。そして、こうした神様のチャレンジの中にあるとき、神様は私達に助け手と小さな大丈夫を与えられます。ダビデにヨナタンがいたように、私達と共にイエス様がおられます。

■ 分を見つけ、分を果たす

2章の最後にはパウロの思いが込められています。「いのちの危険を冒して死ぬばかりに」（2:30）とは「自分に死ぬ」ことです。パウロはそのような人々には尊敬を払いなさい。」と言いました。つまり、尊敬されることは「自分に死ぬ」ことだとパウロは私達に遺言を残しました。なぜなら、彼は自分の分を果たしたからです。私達も分を果たさなければなりません。しかし、自分の分をこえたら傲慢になります。または分に達さず自分なんか…と卑下していることも同じです。

自分を見つける為には、聖書の価値観と自分の価値観が違うことを認め、神様と向き合うことです。パウロのように目線を変えて、神様の心を私の心としましょう。

最後に…

私達は神様の心を知っていますか。神様の心が私の心になっていきますか。

天の父である神様は、子どもである私達によいものをくださる方です。その父は、あなたに同じ苦しみを通して欲しくないのです。だから、私達の周りにある余分なものを取るために、訓練を通されることがあります。しかし、そのような状況のときにこそ、神様は「喜べ」と言われています。

目線が変えられ、問題から神様の御心を探り受け取るチャンスなのです。死に向かうまで（死は最大のチャンスであり神の愛）の準備として明日をどう生きるか（決断）が大切です。

私達はイエス様に出会いました。だから、私達は変わることができそうです。そして、私達も誰かの人生を変える一人になります。

私達の人生を変えてくれた神様の心を知り、私たちの心をキリストと同じ心にしていきたいと思います。

（要約者：岡本 享子）

（2021年11月21日）